

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

もう二十年以上も昔の話であるが、考古学を専攻していた私の弟が、東大の人類学教室で、土器の研究をしていたことがある。そのころは、まだ今日のように、土器の型式による分類などは、ほとんどできていなかった。弟はその分類の仕事にとりかかって、なにか①科学的な分類法がないかと、いろいろ考えていた。

土器の形は、個々の②ヒョウホンでは、もちろんそれぞれ著しく異なるが、特定の地域から出るある時代と推定される土器をたくさん集めて、全体としてみると、その間に共通した一定の型式がある。それによって、何々式という名前があたえられ、大まかな分類がなされていたのである。

こういう分類の方法は、土器と限らず、いわゆる美術骨董品などの鑑定には、たびたび用いられているやり方である。たとえば、注1鍍金仏などを専門家が一目見て、これは注2六朝だとか、もう少し古いかいようなことをいうのは、みなこの型式を見るわけである。仏像とか、絵とか、道具とかいうものは、形が非常に③フクザツであり、そのうえ色だの、材質だのが、変化無限であるから、科学の方でやっているような簡単にめりよう明瞭な分類というものはとうていできそうもない。その点、土器は形も簡単であり、色や材質の差もすくないので、こういう研究目的には、格好の材料である。

ここで科学的の分類という言葉の意味を、ちよつと説明しておく必要がある。科学的というのは、ふへん普遍的な客観性をもつということである。といっても何もむつかしいことではなく、特定な人でなく、だれにもわかるという意味である。

ものには量と質とがあつて、たいていの場合、④の方が⑤よりもわかりよい。二つ茶碗を並べた場合、大小は誰にもわかりまた議論の余地もないが、どっちが古いか、枯かれているとかいふようなこと、すなわち⑥の問題は専門家でないとかわからない。土器の型式といふようなものも、もちろん⑦的な話であつて、⑧的ではない。したがつて専門家でないとかわからない。もし専門家の間に異説があれば、いずれが正しいかを決定することは困難なので、いわゆる権威の説に従うより仕方がない。

それで、こういう場合には科学的な分類を^⑨「ゴコロ」みるとして、一番格格的なやり方は、何か量的な表わし方、すなわち数字か数式かで、いわゆる型式なる「質」を決められないかという研究をしてみることである。壺や茶碗のようなものが一番わかりよいのであるが、何となくどつしりとしていたりとか、素朴な味があるとか、^⑩「ユウビ」な形をしているとかいうのは、壺なり茶碗なり外形をなしている曲線が、それぞれ何か特定の法則にかなうような形をしているからであろう。陶器や磁器では、色とか艶とかいうものも一役買うであろうから、話は少しやっかいになるが、土器の場合ならば、いちおうは形、すなわち曲線の性質だけで、何かの法則が出てきそうである。

弟は^⑪「こういう見こみで、いろいろな土器についてその形を^⑫「セイミツ」に測り、切断面に相当する曲線をたくさん作っていた。土器の形はみなちがうのであるから、この曲線は、^⑬いろいろな形をしている。^⑭一つの型に属する土器の曲線には、何となくたがいに似たところがあり、何か一定の法則がありそうに見える。この法則をうまく数学的に表現することができれば^⑮目的は達せられるはずである。」

それでいろいろな方法で、この曲線を分析してみた。一番簡単なのは、各点の^⑯「わん曲率」を測って、その値が壺の上から下までの間に、どういう変化をしているかを調べてみることである。わん曲率がどこも一定ならば、曲線は^⑰「さく」である。上の方が小さく、下の方が大きければ、下ぶくれの形になる。こういうふうに考えてみると、わん曲率の分布状態で、いわゆる型が表現されそうである。

そして、わん曲率の分布状態をよく見ると、そこには初めの曲線そのものを見るのではわからなかったわずかな違いが、はつきり数値として出てくるはずであった。しかし、このやり方では、ごくわずかな測定誤差でも問題になる。まして相手は表面のどこぼこした形のいびつな土器であるから、測れば測るほど、かえって本当の形からはなれた曲線が、何十本とできることになってしまった。

弟はだいぶ苦しんでいたらしいが、研究がまとまらないうちにパリに行くことになり、むこうで病気をして、帰ってまもなく死んでしまった。それで土器の形の数学的考察という一風変わったこの研究は、とうとう陽の目を見ずにそれきりになってしまった。

今から考えてみると、これはぜひぶん大胆不敵だたんな研究にとりかかったものである。もしこれが出来上がったら、ある時代にある民族または部落民が持っていた精神文化を数学的に規定できることになる。そんなことがやすやすとできるはずがない。しかし不思議なことには、そういう分析などはしないで、ただの眼で見れば、その型式が一眼でわかってしまう。何か差異があるからにちがない。眼で見ればすぐわかるくらいの差異が、セイミツな測定をすればかえってわからなくなるといのは、いかにも妙みょうな話である。

(『茶碗の曲線―茶道精進のある友人に』中谷吉郎)

注1 鍍金仏・・・銅でできた仏像の表面に金メッキをほどこしたもの。

注2 六朝・・・三世紀から六世紀ごろの中国におこった六つの王朝の総称。貴族文化が花開いた。

注3 わん曲率・・・曲線の、ある場所の曲がりぐあいを表す量。

問一 ―部①「科学的な分類法」について、次の問いに答えなさい。

(1) 次の段落に、土器の分類法として「科学的でない」方法が説明されていますが、それはどのような方法ですか。文中の言葉を使って五十五字以内で説明しなさい。(句読点は字数に入れます。)

(2) 「科学的」というのは、どのような意味ですか。文中から二十字でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問二 ―部②・③・⑨・⑩・⑫のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 部④～⑧には、次のどちらの言葉を入れるのが適当ですか。それぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 質 イ 量

問四 ―部⑪「こういう見こみ」とありますが、どのような見こみですか。次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 土器は、数字か数式を使って型式を決められるのではないか。

イ 土器の、何となくどっしりしているとかいう感じは、専門家でないとはわからないのではないか。

ウ 土器とは異なり陶器は、形でなく色や艶のほうが美しさを決めるのではないか。

エ 土器は、形も単色や材質の差が少ないので分類がしやすいのではないか。

オ 土器も陶器も、結局は科学的に分類する難しさはかわらないのではないか。

問五

部⑬・⑭に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ⑬ ところで ⑭ そして

イ ⑬ もちろん ⑭ しかし

ウ ⑬ やはり ⑭ そこで

エ ⑬ すなわち ⑭ もちろん

オ ⑬ 例えば ⑭ たしかに

問六

部⑮「目的」とは、何についてどのようなようにすることですか、文中の言葉を使って二十字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問七

部⑯に当てはまる最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 円 イ 球 ウ 三角形 エ 円柱 オ 正方形

問八

次の中で、本文の内容に合うものには○、合わないものには×を付けなさい。

ア ある特定の民族や部落民の精神文化を、数学的に表すことはそれほど困難なものではない。

イ 人間が眼で見やすくなるような曲率を測ることは、測定するところがはつきりしなくなる。

ウ ある曲線の一部の、わん曲率を正しく測ることは、人間にはとうてい不可能なことである。

エ 人間の眼は、正確に測定するのが難しいような土器の型式も、見て取ることができる。

オ 特定の土器の形を表す曲線を何十本と引いていけば、その土器の型式は自然に明らかになる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

夏は少年にとって大きな脱皮だっぴの季節なのだろう。ひと夏を過ぎると、少年はまたひとつ変っていくのだ。

七月に夏のシベリア①オウダンの旅から帰ってきたあたりで、岳がくが急に大人びてきているのに気がついた。すでに声変わりし、顔つきになんとはなしの「男の意志」のようなものがあらわれてきた。一年前の夏、三宅島で釣りを見た無邪気むじゃきなあどけなさ、といったものはもうあまり見られなくなっていた。

私がいままでずっと風呂場ふろばで刈かっていた素人床屋しろうとこみやをいやがるようになったのはそのシベリアの旅から帰ってすぐの頃ころだった。坊主頭ぼうずめいが②伸びたのを見て、私はいつものように「そろそろ頭刈ろうか」と③キガルな感じで言ったのだ。

すると岳は「まだいいよ」と、私の顔を見ずに言った。

その時はそれで頭の話はしなかった。二回目は夏休みに入る直前だった。坊主からそのまま三カ月間ほど伸ばしっぱなしにしてある岳の髪かみの毛は頭のでっぺんから裾すその方まで同じ長さで伸びてしまっているので、裾の毛が耳みみに覆おおいかぶさるほどになっていた。

「さあ、そろそろ頭刈ろう」

と、私は言った。すると岳は④その時も私の顔を見ずに「まだいいよ」と言ったのだ。しかしその頭はもうどこから見ても「まだいいよ」という状態ではなかった。誰だれが見ても「もうダメだ」というようなムサクルシイかつら頭になっていたのである。

「まだいいよじゃないよ。来い。一緒に風呂場いっしょに来い！」

と、私はなんだか妙みょうにいら立ちながら、私を見ようとしないやつやつの顔をにらみつけた。

岳は私の勢いきほいに圧倒あつぱされたのかそれ以上抵抗ていこうすることなく、素直すなおに私のあとについてきた。

「そんなみつともない頭あたましててどうするんだ」と、私は階段を下りながら言った。岳はふくれっ面つらをしていたが、黙だまって私の言うことを聞いた。

いつものように風呂場の流しの腰こしかけに座まらせ、私はトレーナーの腕うでをまくった。そして岳に「シャツを脱ぬげ」と言った。しか

し岳は私に背を向けて、腰かけに座ったまま、動こうとしなかった。いつもだったら、私が電気バリカンの用意をしている間に、彼は素早く来ているものを脱ぎ、パンツ一枚になって私に背を向け、おとなしく頭を刈られるのを待っているのである。

〈中略〉

「シャツを脱げよ」

と、私は岳に言った。

「脱がないでやるとそのシャツはもう着られなくなるぞ」

と、私は⑤追いうちをかけるようにして言った。しかし岳は黙ったままだった。そして頑なに動こうとしなかった。

私は彼が腹を立てているらしい、ということを知って、私自身もすこし腹を立て始めていた。そこでシャツを着たままでいいからかまわず刈ってしまおう、と思った。

電気バリカンのプラグを差しこみ、すこし空回りをしたあと、岳の頭を鷲つかみにし、首のうしろからバリカンを入れていこうとした。するとその時、岳は片手で鷲つかみにしている私の手首を逆に握り、頭だけくるとふり返るとそのまま私をにらみつけた。それは岳には珍しく本当に怒っている、という顔だった。

「なんだ！」

と、私は言った。

「おとうはよ、こんなふう勝手に自分の好きなようにヒトの頭を刈って行って面白いか！」

と、岳は言った。いつになく強い調子だったので、私はすこしおどろいてしまった。

「どういふことだ？」

と、私も成り行き上すこし荒々しい口調で言った。

「おとうはよ、いつも命令ばかりだよな。自分の好きなように命令ばかりしてよ、命令を聞かないといかって（怒って）よ、それであってばかりいてよ」

と、岳は言った。そこまで言う鼻のつけねの辺を赤くし、私をにらみつけながらふいにボロボロと大粒おおつぶの涙をこぼしはじめた。岳のそんな反応を見るのははじめてだったので私はそこで本当におどろいてしまった。やつの頭を驚おどろづかみにしていた手をはなし、同時に空回りしていた電気バリカンのスイッチを切った。

「なんだ？ 坊主⑥にされるのがいやなのか？」

と、私は言った。

「そんなことは言っていないよ」

岳は私をにらみつけるのをやめ、さっきまでそうしていたように風呂場の窓にむかって頭をいくらか下げ、しばらく黙りこんだ。

「じゃあなんだっていうんだ」

と、私は語気を荒くしたまま言った。

「なんだっていうんだよ……」

もう一度言った。

しかし岳は何も答えなかった。黙っていることで、なんとなくやつの言おうとしていることが私にはわかってくるような気がした。私も少し黙り、次に何を言おうかと考えた。しかし特に何かのコウカ的な文句が浮うかんでくるといふこともなかった。そしてその⑧ケハイはなんとなくひとつのことにかたまりつつあった。

「⑨もう坊主にするのがいやなのか？」

と、私はそのことをもう一度、こんどは静かな口調で言った。岳は黙ったままだった。

「いやなのか？」

と、私はさらにもう一度言った。

「うん」

と、岳は私に背中を向けたままひくい声で言い、足もとのタイルを足の親指でゆっくりなぞった。

「じゃあどういふ頭がいいんだ？」

と、私は言った。岳は何も答えず、妙に長い沈黙ちんもくがつづいた。ふいに、

「どおって……」

と、岳がひくくてかすれた声で言った。

「坊主じゃなけりやどいふ格好がいいんだよ」

岳はすぐには答えず右足の親指でゆっくり何度もタイルの一边をなぞり続けた。それから前と同じ、ひくくてかすれた声で、

「別にどおっていふわけでもないけれど、でも、とにかく⑩こいいうふう⑩に頭を刈られるのはいやなんだ、もう……」

と、岳は言った。

「おれにバリカンでやられるのがいやだっていふわけか？」

と、私は言った。

岳はまたしばらく黙りこみ、それからしゃべりながら、自分の言うことを、ひとつずつたしかめていく、というような感じで、

「別におとうにやられるからいやだというわけではなくて、こいやって、突然とつぜんおとうのきまぐれで、勝手に風呂場に連れてこられ

て、それで、好きなように、おとうの好きなように、どんどん、刈られていく、っていうのが、ぼくはいやなんだ……」

と、言った。

しゃべりおわると、岳はまた右足の親指でゆっくりタイルをなぞりはじめた。しゃべっているときはそちらの方に自分の全神経を集中させるから、足でタイルをなぞり続けている余裕よゆうがなかったのかもしれないな、と私はその足の動きを見つめながら考えていた。それにしても岳の言っていることはなかなか⑪セツトク力⑪があった。

「そうか……」

と、私は言った。しかしだからどうすべきなのか、ということはその時点ではよくわからなかった。

「じゃあ、どうしたらいいんだ……？」

と、私はそのつぎに言った。岳は何も答えなかった。

「今度からは床屋に行つて床屋に刈ってもらうようにするか？」

と、私は言った。

「おまえの好きなようにさ、おまえの行きたい時に行つて……」

「うん」

と、岳は私に背中を向けたままかすかに聞こえるような声で言った。

かくして風呂場で岳の頭を刈る、という私の仕事はその年でおしまい、ということになった。風呂場の散髪は岳が保育園に行っている頃からやっていたので八年ほども続いたことになる。そしてそれは私にとって結構楽しい仕事であった。

その日の夜、私は妻にこのことのいきさつを簡単に話した。

「やっぱりなあ、だんだん反抗的になつてきているよ」

と、夜更けのぬるいコーヒーを飲みながら私は言った。しかし妻の考え方は違つていた。

「反抗、とかいうのではなくて彼の自立、というようなものじゃないかしらね。オトコの自立期になつてきているのよ」

と、妻はすこしコシヤクなことを言った。

「そうか、自立期か……」

反抗ではなくて自立、というふうに理解すると私はすこしやわらかい気持ちになった。そうか、そういうことなのかもしれないな、と私はコーヒーをすっきり飲み干してから一人でうなずいた。

問一 — 部①・③・⑦・⑧・⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 部②に当てはまる最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ツヤツヤに イ ドロドロに ウ ボサボサに エ ザラザラに オ テカテカに

問三 — 部④「その時も私の顔を見ずに『まだいいよ』と言ったのだ」とありますが、なぜ岳はそのような返答をしたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の見た目に関心がなく頭を刈ることがどうでもよかつたから。

イ 今集中してやっていることを最後まできちんと終わらせたいから。

ウ いつも一方的に指示をしてくる父親の言いなりにはなりたくないから。

エ たまにしか帰ってこない父親と向き合うのがはずかしいから。

オ 父親の顔をきちんと見ながらことわる度胸がなかったから。

問四 — 部⑤「追いうちをかける」の意味として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 十分に時間を与えてから追いかけること イ にげる者を追いかけてさらに攻撃こうげきすること

ウ 最後まで追いかけることができなくなること エ 追いかけてその場所から無理にどかせること

問五 — 部⑥「坊主にされるのがいやなのか?」、部⑨「もう坊主にするのがいやなのか?」は「私」のほぼ同じような質問

ですが、「岳」の返答はそれぞれ異なります。その理由を説明した次の文の 部A・Bに当てはまる言葉を、それぞれ八字以内で文中の言葉を使って書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

一度目の父親の言い方は A ので、「岳」は直接には答えなかった。しかし、二度目の父親の言い方は B ので、素直に答えることができた。

問六 —— 部⑩ 「こういうふうには頭を刈られる」とありますが、どのようなことを言っていますか。解答らんに合うように、文中の言葉を使って三十文字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問七 次の中から、本文の内容に合わないものを選び、記号で答えなさい。

ア 「岳」ははげしい抵抗をすることなく、風呂場まで素直に「私」のあとについてきた。

イ 「岳」はシャツを着たまま頭を刈られてもいいと、「私」に対して開き直っていた。

ウ 「岳」は「私」をにらみつけながらふいにボロボロと大粒の涙をこぼしはじめた。

エ 「私」は「岳」が泣きながら言おうとしていることがわかってくるような気がした。

オ 「岳」は一通りしゃべりおわるとまた右足の親指でゆっくりタイトルをなぞりはじめた。

問八 —— 部⑫ 「すこしやわらかい気持ちになった」とありますが、「私」の気持ちはどのように変化しましたか。百字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)